

子どもの発達に影響を及ぼす諸要因の検討 その1

—東アジアこども発達スケールを用いて—

○ 山際勇一郎 (首都大学東京)
梅崎高行 (甲南女子大学)
佐藤真理恵 # (東京拘置所)
中村淳子 (田中教育研究所)

小湊真衣 # (田中教育研究所)
高 向山 (常葉大学)
青柳 肇 # (田中教育研究所)

青柳他 (2007), 山際他 (2007) などでは, 発達支援尺度を作成した。これらの研究では, 就学前の子どもを対象として, 発達の支援のための東アジア圏の子どもに共通する発達スケールを作成することが目的であった。それは就学前の子どもには差異よりも共通する要素の方が圧倒的に多いと考えられたからであり, 青柳他 (2013) では 11 領域 102 項目からなるスケールが作成された。当初, 149 項目が検討項目として用意されたが, 作成過程において共通の要素の抽出という目的に合わせて取捨選択を行い, その結果 102 項目のスケールとなった。すなわち, 共通という目的に合わないなどの理由で棄却された項目があった。

そこで, 本研究では視点を転換し, スケールの上でどのような内容に差異が見られるかということに焦点を当て, 子どもの発達に影響を与える要因について検討を行う。影響因として取り上げる要因は, 性別と通園施設である。一般的に成人までの発達, 特に小学生くらいの年齢では, 種々の側面において女子の方が男子より発達が早い, 就学前の子どもにおいては, 性差よりも月齢差・年齢差の方が大きいと考え, 発達スケール全体としては特別な処理をしていなかった。そこで, 性差について再検討を行う。通園施設として, 保育所と幼稚園の差異を取り上げる。この点についてはインターネットで検索を行うとわかるように, 養育者・保護者の意見も多種多様である。そこで, 本スケール上でどのような点に差異が見られるかを検討する。なお, 本研究では, 11 領域のうちことばの理解とことばの表現について取り上げる。ことばの理解は, きょうの曜日が言える, 名前を呼ばれたとき, はっきりと返事ができるなどであり, ことばの表現は, 「赤ちゃんことば」を使わないで話せる, 自分の名前を正しく書けるなどである。

方法

調査対象者は, 日本, 中国, 韓国の 3 歳から 6 歳の子どもの保護者 3828 名であり, 子どもについて回答させた。本研究では, それらのうち日本のデータ 1178 名を分析対象とした (表 1)。回答形式は, 全くできないからよくできるまでの 4 段階の評定尺度であった。調査期間は, 2006 年から 2007 年であった。

表1 分析対象者の内訳 (欠損値1名)

		年齢(歳)				合計
		3	4	5	6	
保育所	男	26	37	33	13	109
	女	20	30	31	10	91
幼稚園	男	107	170	190	46	513
	女	104	147	159	54	464
合計	男	133	207	223	59	622
	女	124	177	190	64	555

結果

性差について t 検定の結果, 有意となった項目数を表 2 に示した。有意差があった項目数は, 全項目数と比べるとどの年齢でも 3 分の 1 を越えず少なかった。しかも中程度の効果量 ($r > .3$) は 6 歳のことばの理解の 1 項目であった。また, 発達とともに項目数が減少する傾向が見られた。

表2 女子の方が有意に得点が高かった項目数

	3歳	4歳	5歳	6歳
ことばの理解 (全項目数 = 17)	4	2	2	1(1)**
ことばの表現 (全項目数 = 15)	5	5	5+1*	2

*: +1は男子の方が有意に得点が高かった項目数。

**: ()内の数値は, 効果量が中程度($r > .3$)を超える項目数。

続いて, 通園施設について t 検定の結果, 有意となった項目数を表 3 に示した。全項目数に対して有意となった項目数は少ないが, ことばの理解では比較的多かった。また, 発達とともに有意な項目数は減少している。ことばの表現については, 有意になった項目は非常に少なかった。なお, ことばの理解で 3, 4, 6 歳児において, わずか 2 項目のみ中程度の大きさの効果量が見られた。

表3 幼稚園の方が有意に得点が高かった項目数

	3歳	4歳	5歳	6歳
ことばの理解 (全項目数 = 17)	4(2)**	8(2)**	2	3(2)**
ことばの表現 (全項目数 = 15)	0	3(3)**	0	2

**: ()内の数値は, 効果量が中程度($r > .3$)を超える項目数。

考察

ことばの理解と表現の発達について, 影響を与える要因として, 性別と通園施設を取り上げた。女子の方がことばの発達が早いと思われがちであるが, そのような傾向は見られなかった。また, ことばの理解にわずかながら幼稚園の方が得点は高かったが多くの項目には差がなく, 特に表現については全く差がないと言えよう。幼稚園や保育所に通園していない子どものデータがないので解釈は多少限定的であるが, 5 歳, 6 歳と差がますますなくなることから, 集団生活を行うことが他の要因の効果を上回ると考えられる。